

この胸のときめきを

2006(平成18)年9月9日宣伝用ビデオ鑑賞<OS 劇場で上映中>

★★★★



監督・脚本・台詞＝ダミアン・オドゥール／出演＝レティシア・カスタ／ブノワ・マジメル／マッテオ・タルディート／ヤン・ゴーヴァン／フィリップ・フレコン／ローランス・アジザ／ヴァレリー・ダッシュウッド (ワイズポリシー配給／2002年フランス映画／95分)

……フランス「愛の3部作」の第2部は、どうしようもないダメ男と何度も裏切られながら、そんな男を見捨てることができない女との哀しい愛の物語……。アルジェリア戦争の傷跡が残る（といっても日本人には容易に理解できないが……）1968年から3つのパートに分けて綴られていく物語は、イライラする面はあるものの、いかにもフランス的……。さて、何がフランス的なのかは、あなたの目でじっくりと……。

第2部は、どうしようもない男との愛がテーマ

フランス「愛の3部作」の第1部『ブラウン夫人のひめごと』（02年）は、そのタイトルどおりのイメージの映画だった。しかし、第2部は、どうしようもないダメ男の子供を産み、裏切られ続けながら、なおその男との関係を断つことができない悲しい女の姿をテーマにしたもの。そしてこの映画がモチーフとしたのは、イギリスの女性ポップス歌手ダスティ・スプリングフィールドが歌った『この胸のときめきを』（You Don't Have To Say You Love Me）。これは私が高校3年生の時に大ヒットしたカッコいい曲だが、その後エルヴィス・プレスリーが歌ったことによって、さらに全世界に広まった名曲。

もっとも、今でもその歌詞の正確な意味を知らない私は、その当時から勝手にこの曲のイメージを「前向き」なものと解釈していたが、ひょっとして本当は逆で、この映画のように切ないもの……？

いるいる、こんなダメ亭主……

仕事もせず、酒やバクチそして女が大好き、そのうえええカッコしい、そんな男は世の中にごまんというが、意外なのはそんな男に限って(?)、美人でしっかりとした女がついており、じっと耐えながらその男と一緒にいるケースが多いこと……? 私は、人生57年弁護士生活32年の中でこんな夫婦の姿をたくさん見てきた。この映画の主人公ジャック(ブノワ・マジメル)はそんな典型的な男だが、今日は妻の出産日。かなり難産らしく、妻のルー(レティシア・カスタ)は叫び声をあげており、その声を聞いたジャックは分娩室内まで入って行きかねない勢い。こんな姿を観ていると、こんなダメ亭主でも妻への愛情や産まれてくる子供への愛情はいっぱい持っていることを実感……。

フランスにおけるアルジェリア戦争の傷跡は……?

今日は2001年の9・11テロから丸5年を経た日だから、アメリカではさまざまな行事が行われている。この9・11テロ以降開始されたのが、ブッシュ大統領の決断によるアフガン戦争とイラク戦争だが、その賛否を巡っては次第に反対論が強くなっている様子……。

そのアメリカは、アフガン戦争、イラク戦争以前に1960年から1975年のベトナム戦争による傷跡を大きく残しており、その有り様は、『地獄の黙示録』(79年)、『プラトーン』(86年)等、さまざまな名作で表現されている。

『この胸のときめきを』のプレスシートにあるダミアン・オドゥール監督へのインタビューを読むと、それと同じようにフランスでは、アルジェリア戦争の記憶とその傷跡が大きく残っているらしいが、これは日本人にはなかなかわからない、彼方の国の歴史……?

アルジェリア戦争は1954年に始まり、第五共和政のシャルル・ド・ゴール大統領の和平交渉によって1962年にアルジェリアの独立が認められて終了したが、1968年生まれのおドゥール監督は、1968年当時20歳を迎えていた世代をイメージして、この映画をつくったらしい。つまり、アルジェリア戦争によって男たちは傷を負っており、女性たちも今日のように解放されていない時代における、男と

女の、家を築き希望を分かち合う夢のあり方を描きたかったというわけだが……。

1968年、第1の舞台はジェヴォーダン地方

最初の舞台はフランスの内奥地の1つであるジェヴォーダン地方で、時代は1968年。ここはオドゥール監督の出身地であると共に、ジャックの出身地で、この地方から最も多く若者がアルジェリア戦争にかり出されたとのこと。したがって、この戦争で心の平穏を失った若者たちが虚無的になり、怪しげな行動に走ったとしてもやむをえないもの(?)で、実はジャックもその中の1人……?

1972年、第2の舞台は地中海を臨む海辺

難産の末に息子を出産したルーは、4年後の1972年にはジャックと共に地中海を臨む海辺で家族仲良く(?)生活していた。ジャックは酒もそして怪しげな連中との付き合いも断つと宣言して、今は不動産屋として働いているが、そのやり方をみていると、どうも「悪徳」と呼んだ方が良さそう……? 4歳の息子セザール(マッテオ・タルディート)を可愛がっているものの、どうも酒とオンナは途切れていないようだし、悪い仲間との腐れ縁も……? そして案の定……?

フランスの男は日本人男性と違って口が達者だから(?), 妻をほめたり妻に謝ったりと忙しく実によくしゃべるが、何と今回は、自分が女と一緒にいたのに、妻の貞節を疑うという始末。これにはルーも堪忍袋の緒が切れ、遂にセザールを連れて出ていくことに……。

第3の舞台は1年後、都会の真ん中で……

1年後、実家で暮らしているルーの元にジャックから電話があった。それはアル中だった自分を反省し、治療をして必ず立ち直ると誓うと共に、心の底からルーに詫びをいれやり直しを求めるものだった。弁護士生活を32年もやっていると、人間の本性はそう簡単には変わるものではないことがよくわかるもの……。そんな私がみていると、今回の誓約もどうかと思うものだったが、こんな心の底からの全面的な謝罪に、女は弱いもの……?

1年ぶりに再会した2人はしっかりと抱擁をくり返し、未来の家の姿を語り合

い、ナイトクラブで踊っていたが……？

2人の演技力はさすが……

このようにオドゥール監督は、アルジェリア戦争直後の不安定な2人の姿を3つの時代と3つの舞台の中で描くが、1968年～73年までの間の2人の変わりようがこの映画の1つのポイント。

まず海辺の舞台でのルーを演ずるスーパーモデルとして活躍中のレティシア・カスタは、金髪に染めたのははじめてとのことだが、それを含めて、3つの時代における女のココロの動きをうまく演じ分けているのはさすが。他方、観ていて「あれっ」と思ったのは、4年後のジャックの腹が急にポテッと出ていたこと。最初は私の見まちがいかと思ったが、プレスシートを読むと、これはオドゥール監督がブノワ・マジメルに対して要求した結果とのこと。そこまで役柄に徹底したブノワ・マジメルも立派のひとつと言……。

こんな愛の描き方がフランス流……？

酒もオンナも断ち、妻と子供だけを愛しながらまっとうに生きていこうと決心するのだが、何らかの要因によって、その約束は反故となり、結局は絶望的な状況になっていくという、哀しい愛の物語は日本にもあるし、世界各国にもあるもの。ちなみに坂和的にいえば、北条秀司の傑作『王将』の主人公、阪田三吉などは、日本のそして大阪のそんな男の典型……？

しかし、フランス流の愛の描き方はあくまでフランス的で、大阪弁が飛び交う阪田三吉の物語とは大きく異なり、やはり愛のレベルはフランスの方が数段上……？ とまでは言えないだろうが、こんなダメ亭主でもやはりフランス男は愛を語らせればみんな一流……？ そして日本人には何ともわかりにくいアルジェリア戦争の傷跡をうまく活用しながら、傷ついていく男と女の愛をこんなに鋭く分析しスクリーン上に表現しているのを観ると、やはりこんな愛の描き方がフランス流……？

2006（平成18）年9月12日記